

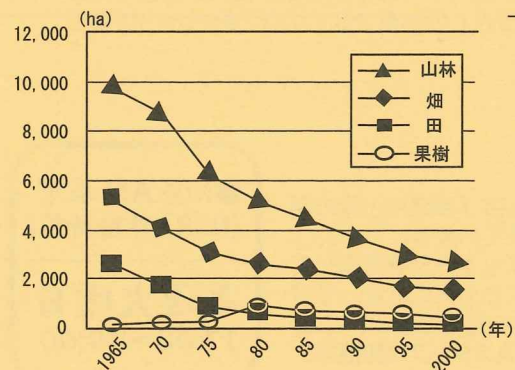
身近な里山と

暮らしを結ぶ

緑被率ってご存知ですか？
上空から見たときの緑に覆われている土地の割合のことです。樹林地だけではなく草地や農地、街路樹も含まれます。平成一六年の調査では、横浜市全体で一六％でした。緑区で四四・三％、栄区、泉区でかろうじて四〇％を越えています。横浜市内の緑は、鎮守の森を除き、かつてはほとんどが「暮らし」に関わりの深い林か、農地でした。田畑で生産物をつくるだけが農業ではありません。コナラやクヌギ、サクラがある雑木林は、薪を取り炭をつくり、落ち葉を土づくりに利用するなど、農業には欠かせない存在でした。また昭和四〇年代には、横浜は市の県内一の産地でもありました。竹林は筍生産だけでなく、カゴや作物の支柱など農業資材を得る場としても必要だったのです。大規模な宅地開発の波、輸入材におされ経済的価値が暴落したスギ・ヒノキ、薪炭から石油エネルギーへの転換、そして作

物の栽培技術の変化によって、樹林は「農」や「暮らし」と分断され、やがて姿を消していききました。現在残っている場所のほとんどは、公的に確保されたか、開発を免れている斜面緑地だと思えます。今日もあちこちで、樹林地を崩し、マンションなど大型施設の建設がすすめられています。
同時に、美しい谷戸田の景観もわずかばかりとなつてしまいました。横浜の子どもたちの多くは、米づくりに勤しむ姿を見たり、色とりどりの草花、ユニークな虫たちとふれあうことから、知らずに育っています。
しかしこれらは、今を生きている私たち大人が、知らず知らずのうちに選択してきた「暮らし方」の結果なのです。
生きものの世界では、太陽や空気、水、土によって育まれた植物が食物連鎖の底辺を支えています。植物の一部は、農家の手によって、はじめて野菜や家畜の飼料となっています。木々は二酸化炭素を吸収し酸素を生

み出してきています。それら多くの恩恵を受けているのが私たち人間です。ところが、目前から自然や農環境が失われると、自分の身体と自分が生かされている環境（自然、農、地域、社会など）がなくなっていることを、感じたり理解することがとても難しくなってしまうのです。
身近な里山と暮らしを結びなおす：私たちは、里山の情報を発信し、人々と里山の関係をより近くすることで、日々の暮らしにその魅力や資源、知恵を活かすことができる人を増やしていきたいと考えています。
横浜には「里山のかげら」しか残ってはいませんが、小さな緑地でも未来につないでいくタネが必ず生きています。
食の生産現場であること、水、緑がさわやかな風をもたらすこと、多様な生きものたちとのふれあいが心や文化を育てること・・・。そんないくつものタネを、地方から移り住んだ新住民、先祖の代から横浜に住む地元民、



ほかさまさまざまな人たちが身近な里山でつながりあって大きく育てていくことができると思うのです。
私たちは「横浜ならではの里山」のあり方をこれからも考えていくとともに、心に里山の風景を描き続けることのできる暮らしを提案・実践していきたいと思つています。今を生きる世代が幸せに暮らすためだけでなく、未来の子どもたちのためにも。
(理事 吉武美保子)



春号
平成19年
No.19
リニューアル
創刊号

里山と暮らしをつなぐ

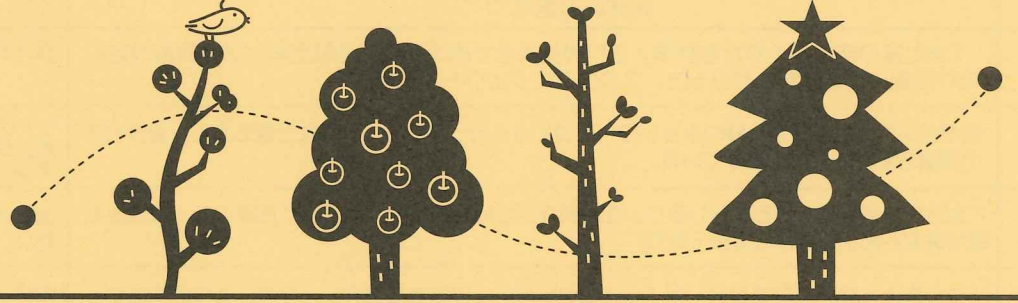
事務局よりぜひお伝えしたいコト

NORAよりかしこ

●桜の利用でひとをつなぐ
南区さくら利用プロジェクト
「伐採される大岡川のソメイヨシノを材として利用できないだろうか？」、南区役所からこんな調査依頼を受けました。「ソメイヨシノは使い道がない」、これが木材業界の共通認識。そこで木工ワークショップを開催し、使い心地を確かめてみました。結果、材質はよく使われるなヤマザクラとほとんど同じで、部位を選べば十分使えることがわかりました。
さてこのあとが問題です。定期的に利用するには木を製材する必要があります。しかし横浜に大きな丸太をひける製材所はすにありません。ある製材屋さんの協力を得て試してみましたがやはりダメ。結局、厚木の製材所にお世話になることになりました。県内でも大木をひける製材所はほとんどやめてしまったそうです。
近くに資源があるのに、それを使う技術が無いから使えない。以前、雑穀を精白できる精米所が見つからなかったときにも感じたこととです。身近なモノを使わなくなると、それに付随する仕事もなくなり、ふたたび使いたいと思つてももう使えない。「いまはコストを抑えるばかりで職人が技を使う場がないんだよ。このままじゃ木を使う技術がなくなってしまう」とある建具屋さんは言います。

●NORAに女性研ぎ師登場!!
昨年のNORAサロンでのこと、講師の埋橋真弓さん(研ぎ師・食生活アドバイザー)に研いでもらったばかりの包丁で、三好さんから届いたキャベツの千切りに挑戦してみると、ナ、ナントとんかつ屋さんのごとき美しさ。さらにキャベツの歯ざわりといい甘さといい、美味。吸い付くような切れ味で、大根もきゅうりもパリッとした歯ごたえ。玉葱のみじん切りはなぜか涙が出ない・・・表面がスバツと切れているからなのね。これぞ目からウロコ。かくして、第1・第3火曜日の午後、NORAに埋橋さんの包丁研ぎコーナーがお目見えしました。手に馴染んだ包丁も定期的研いでもらえば新品同様！身近な道具を大切に、おいしい野菜はさらにおいしく食べたいものです。ノボリやチラシを見て来られるご近所さんとのうれしい出会いも増えています。毎週火曜5時からのNORA野菜市

●NORA運営の市民農園つくりたい!!
一昨年に特定農地貸付法が改正され、今まで行政や農協しか開設できなかった市民農園が、農家のほか、企業やNPO法人なども開設できるようになりました。私たちが農園運営をしたら・・・。
た、小さく区画された農地を希望者に割り当てるだけではツマラナイので、こんなことを考えています。
★農地と森とをリンクさせる。落ち葉をかいて堆肥をつくり、土づくりを基本にした美味しい作物を自給する農園を目指す。
★農園のある場所の景観を損ねないような作付をする。
★利用者には栽培方法だけでなく、収穫した作物を十分に生かす方法(調理・保存等)を伝えていく。
★研修やイベントなどの仕掛けを通して新しいコミュニティをつくる。
さて、こんな市民農園あったら、借りたいですか？え？いくらで借りられるのか、つて？・・・考えときます。(M)



のらくらぶ～春の号 平成19年4月15日発行

【発行・編集】
特定非営利活動法人よこはま里山研究所～NORA
のらくらぶ編集委員会
〒232-0017 横浜市南区宿町2-40大和ビル119
TEL 045-722-9674 FAX 045-722-9675
http://www8.ocn.ne.jp/~satoyama/
nora-y@estate.ocn.ne.jp

【NORA会員および年会費】
運営(正)会員:12,000円
一般(準)会員:3,000円
賛助会員:個人一口10,000円、法人三口以上
*いずれも「のらくらぶ」送付・イベント割引など特典あり。
郵便振替口座:00200-4-72504 よこはま里山研究所
お問合せはNORA事務局まで。



野菜を食べれば食べるほど 畑は活かされる。

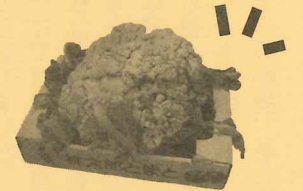
今日のNORAびとは
三好豊さん
(神奈川・緑の劇場)

三好さんとの出会いは2年前。以来、NORAの事務所がある大和ビル中庭で、毎週火曜に野菜市を開いてもらっています。野菜の流通に関わって20年。「神奈川・緑の劇場」を2年前に立上げ、神奈川に徹底的にこだわって農産物の移動販売をしている三好豊さんの一日に密着しました。

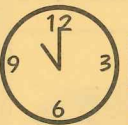


8:30...三浦市の深瀬さん宅で、大根、キャベツ、超特大カリフラワー、カブを積む

昨夜までに、県西部伊勢原・小田原方面の農家を7件回って野菜を集荷。早朝に瀬谷区の原さん宅で長ネギを積んだ車は超満載。「深瀬さん、らっきょう作ってみませんか?」。三好さんは「まち人」にらっきょう漬けをすすめ、生産者には作付けをすすめる。私たちが何を求め食べるかで畑の様子は変わってくる。神奈川の風土にも適し、保存食としても身近ならっきょうは、農作業が手伝いやすく、作る人と使う人の交流にも役立つ作物だ。



▼毎月第3金曜日 12:00~16:00

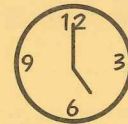


11:00...「フォーラム南太田・地モ/野菜市(南区南太田)」会場着

若者たちが10名以上で待ち構えていた。様々な事情で社会体験を必要とする若者たちだ。半数以上は毎月のように販売体験をしているという。引率する若者就労支援NPOのスタッフは言う。「三好さんは個人の能力にかかわらず全員を受け入れてくれる。初参加の若者たちもリラックスし、やがて仕事の意義や楽しさを感じるようになる」。これほど参加者の多い体験の場は他にないそうだ。「売れなくても仕方ない、話題づくりさ!」と並べた超特大カリフラワーはすべて完売。お客さんと若者たちの歓声があがった。



野菜がいっぱい詰まった「宝船」みたいな車で三好さんはやって来ます(ゆい野菜市)

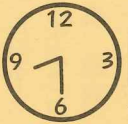


17:00...「ゆい野菜市(南区堀ノ内)」に到着 ◀毎週金曜日 15:30~19:00 (第3金は17:00から)

「この野菜は物がいいって評判よ!」「近ごろは旬がわかんなくなってるよね」「神奈川じゃ、玉ねぎは5月から、じゃがいもは6月、なすやピーマンはもっと先なんだって」、お客さん同士の会話がはずむ。八幡橋から20分以上歩いて買いに来る人、勤め帰りに蒔田駅でわざわざ降りて買って上大岡に帰る人、試食用スプーンが見当たらなかったと聞いて、わざわざ届けに戻ってくれる人。毎日の暮らしに必要な「野菜」の流通は、同時に人と人をつなげている。



フォーラム南太田で、若たちと



20:30...おまかせ野菜セット6人分を大和ビルへ届けて一日が終了

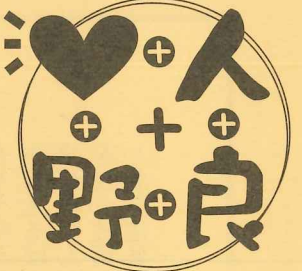
セットを頼んでいる1人暮らしの人たちは、以前の3倍は野菜を食べるようになったという。「みんなが食べてくれるから生産者は野菜をつくるんだよ」。「生産者」と「まち人」の心をつなぐのが三好さんの仕事である。

レポーターのひとこと

「神奈川の農産物を食べれば食べるほど、神奈川の農地が活かされる」。三好さんは「神奈川・緑の劇場」で〈野菜を語る八百屋〉を演じながら、このメッセージを日々「まち人」に伝えています。私たちは毎日食べ物を選ぶことで、どんな農業を支持しているかという、強烈なメッセージを発信しているのです。自分の住んでいる地域を知り、そこが活かされる選択を日々かさねることの大切さを、三好さんの1日取材して感じました。神奈川の野菜にこだわるができるのは、ほかの誰でもない、ここで暮らす私たちなのです。ぜひ、NORA野菜市に足を運んでみて下さい。(NORAスタッフ 前田朋英)

●NORA野菜市 (NORA事務所前)
毎週火曜日
17:00~19:00

食に風景あり。



葉山限定! 「三浦ダイコン」

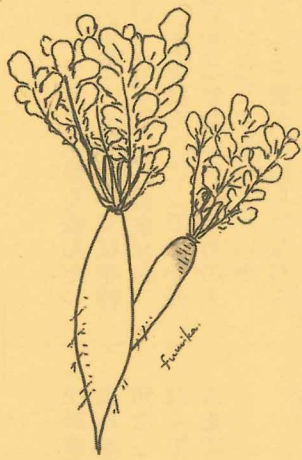
温 暖な三浦半島の葉山では、農産物品評会が農閑期の真冬に開かれます。数年前の正月、品評会後の直売で地元産の三浦ダイコンを初めて手に入れました。このダイコンは一般的な「青首ダイコン」よりもずっと中太く大きく、それでいて煮物にすると身がしまって味わい深い由来品種です。しかし今では、名のつく三浦ではあまり栽培されていないので、私は横浜や鎌倉の直売所を巡って手に入れていました。やっと見つけた地元のダイコンは入賞品にもかわらずとも小ぶりな、大柄なダイコンを見慣れた目にはちょっと期待はずれ。

と ころが、プリのアラ出汁で煮込んでみると、その中には驚きの味わいが隠されています。身が均一につまんで煮くずれせず、口に含むとムラなく柔らかい。舌ざわりも心地よく、まるで固めのゼリーのように出汁とともに溶けていきます。相模湾のプリと三浦の山里のダイコンの見事な競演。生産者のAさんは町内N地区の女性。地元の海で回遊魚のプリが獲れるのも意外ですが、地元の畑にそれにぴったりのダイコンがあったとは!

がとてもいい、とのこと。同じ品種の野菜で、土地により姿や味がこれほど違うことが驚きです。

一 昨年、お手伝いしているN地区の保育園で、「近所の農家に野菜を直売してもらおうと相談に何うと、それが生産者Aさんでした。週一回の夕方、保育園の玄関には季節の野菜が小袋入りで並び即席の直売コーナーが出現。子どもたちにもお迎えのお母さん方にも大人気です。そして、あこがれの三浦ダイコンも並ぶのですが、この味わいの魅力を保育園でつい話してしまったために、私の仕事帰りの時にはいつも売り切れです。(葉山 山里会 成田 櫻)

産 家や農協のお話では、葉山周辺の土は「はねっこ」と呼ばれる重い粘土質のため、ダイコンやイモなどの根菜類は、姿形は小さくて見た目が悪いが、味や食感



NORAレポート 区が行う緑保全施策(第1弾)

地域の緑を守り育てるには、地域の力が必要です。公的な緑地保全是公園や市民の森、緑地保全地区などの全市レベルの施策がほとんどですが、現場をかかえる区ではどのような取り組みがあるのでしょうか。調べてみると各区の都市計画マスタープランでは「水・緑」の環境づくりやネットワークづくり、といった言葉が謳われています。具体的にどのような事業が行われているのか、特長ある事業や市民の参加のしかたについて伺いました。

	具体的な施策	課題・展開
旭区	「水と緑のまちづくり行動計画」を検討委員会で策定。区民活動団体と活動計画策定に向け調査、現地視察など行った。7つのプロジェクトがある。	具体的な活動を計画中。
青葉区	黒須田川流域周辺で水と緑のネットワークづくりを行っている。小さな公園も多く、愛護会等の環境活動の活性化を図っている。	ワークショップで黒須田川流域周辺お散歩マップ作成。出前講座等による環境活動支援。
泉区	「泉区民の緑環境を守るみちしるべ」を委員会を組織して策定。地権者と協議の上、民有地で緑地保全活動する団体に支援・助成。	現在4団体。もう少し増やしたい。
都筑区	「つづき水と緑の検討委員会」が「水と緑の魅力アップ推進委員会」となり、4つのプロジェクトが行われた(緑道・南部・早瀬川・中央地区)。	南部(農や歴史のある地区)と中央との交流。
戸塚区	「緑のオープンスペース豊かなまちづくり」には、5つの森の保全、地域と連携した谷戸環境の保全、傾斜緑地の保全、農地の保全などが記されている。	左記をふまえたまちづくりプランも策定。区民参加の休耕農地対策を検討中。
保土ヶ谷区	「水と緑と歴史のまちづくりビジョン」に保土ヶ谷固有の自然を大事にする、とある。そのPRとして広報活動を実施。	17年度で終了したまちづくり講座から緑地保全の自主団体が発足、18年度は自主運営の支援。各地域や個別の活動の連携を図り総合的プランにしていきたい。